



横浜市民ギャラリーコレクション展2018

写真と素描で たどる横浜

1950—1980年代を中心に

Tracing the Scenery of Yokohama
through photographs and drawings 1950-1980



ごあいさつ

横浜市民ギャラリーは、1964年の開設から、日本の現代美術を紹介する年次展覧会や海外の姉妹友好都市との交流展、横浜にゆかりのある作家の個展など、さまざまな展覧会をおこなってきました。展覧会を機に収集した1,300点におよぶ所蔵作品は、年に一度「コレクション展」を開催し公開しています。

今回は、横浜を主題に、戦後1950～1970年代に撮影された五十嵐英壽（1931年生まれ）、奥村泰宏（1914～1995）、常盤とよ子（1930年生まれ）、浜口タカシ（1931年生まれ）の写真、横浜開港120周年にあたる1979年に開催した〈横浜百景展〉にあわせ制作された素描、1988年に横浜と上海の友好都市提携15周年を記念した〈横浜市美術展・横浜百景〉の際に撮影された写真、あわせて105点を展覧し、異なる視点やフレーミングで描き写された作品から横浜の風景の移り変わりをたどります。

また会場では、2つの特集展示をおこないます。特集展示1「横浜市所蔵カメラ・写真コレクション」では、カメラ・オブスクーラやカメラ・ルシーダ、19世紀後半の風景写真などを展示し、写真と絵画の関係を探ります。特集展示2「漫画家・ヒサクニヒコが描いた横浜」では、1978年に開催された〈ヨコハマ漫画フェスティバル〉に出品されたヒサクニヒコ（1944年生まれ）の作品5点と、ヒサが制作した横浜に関連する作品をあわせて紹介します。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた関係者、関係機関の皆様にご心より御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリー

横浜

1950-1970

Yokohama 1950-1970



- 1 浜口タカシ《市電の詩》1957年
ゼラチン・シルバー・プリント 38.9×38.4cm
- 2 常盤とよ子《窓日の出町裏》1955年
ゼラチン・シルバー・プリント 25.9×39.6cm
- 3 五十嵐英壽《大棧橋満席》1966年
ゼラチン・シルバー・プリント 31.9×47.6cm
- 4 奥村泰宏《尾上町交差点》1949年
ゼラチン・シルバー・プリント 33.9×33.9cm



1945年、終戦後の横浜では、戦災を逃れた建物は進駐軍の接収により軍施設や軍人用住宅となり、焼失した地域にはカマボコ型の兵舎が建ち並びました。奥村泰宏（1914～1995）は、変わり果てた故郷を目の当たりにし、占領下の桜木町や関内を中心に市内の様子や人々の姿を市民の目線で写しました。常盤とよ子（1930年生まれ）は、赤線地帯の女性たちが働き生活を営む場所に通り、一定の距離を置きながらその日常を写真におさめました。浜口タカシ（1931年生まれ）は、報道写真家として社会問題や自然災害など歴史に残る出来事を記録する一方で、生活拠点である横浜の移り変わりをとらえています。五十嵐英壽（1931年生まれ）は、神奈川新聞社写真部に勤務する傍ら、ライフワークで港の風景を写し続けてきました。横浜港に出入りする船や港を舞台とした人間模様を写した写真には、戦争の跡が残りながらも活気ある横浜の様相を見ることができます。



5



6



7



8

素描でたどる
横浜百景 1979
Tracing the "Various Views of Yokohama"
through Drawings in 1979

横浜開港120周年にあたる1979年に開催された〈横浜百景展〉には、横浜の風景を作家が各々に素描した作品が出品されました。完成した作品としての存在感と、制作の過程を示すような即興性、流動性を持ち合わせる素描には、横浜の多種多様な表情と共に、作家の個性が表れています。浅生田光司(1925年生まれ)が描いた常盤公園[図版6]は、保土ヶ谷にある緑豊かな公園で市民の憩いの場所として親しまれています。公園は、保土ヶ谷出身の実業家・岡野欣之助が1914年に一般公開した別荘・常盤園の一部にあたります。浅生田は、限られた線と色によって、大正時代から大勢の人々が訪れてきた園の普遍的な自然美を描写しています。山崎秀夫(1924-1983)の《紅葉坂》[図版5]は、現在の横浜市民ギャラリーに程近い風景を切り取っています。右手に描いた前川國男(1905-1986)設計の県立青少年センターの屋上には、2003年に撤去されたプラネタリウムを見ることができます。山崎は、均整のとれた画面構成と色調によって坂の中腹の景色をとらえています。

- 5 山崎秀夫《紅葉坂》1979年 鉛筆、水彩、紙 35.1×27.3cm
- 6 浅生田光司《常盤公園寸景》1979年 水彩、マジック、紙 33.1×48.2cm
- 7 櫻庭彦治《三溪園の五月(1)》1979年 油彩、パネル 23.2×30.1cm
- 8 大坂三千司《中央市場》1979年 鉛筆、水彩、紙 30.3×40.2cm

写真でたどる
横浜百景 1988
Tracing the "Various Views of Yokohama"
through Photographs in 1988

1988年、横浜と上海の友好都市提携15周年を記念して、横浜市美術展が開催されました。この展覧会は、〈横浜百景〉と〈横浜書展〉の二部構成で、横浜にゆかりのある作家の新作が展示されました。〈横浜百景〉に出品された作品は、油彩画、版画、日本画、写真といったジャンルの多様に加え、作家によって選ぶ場所やテーマもバラエティに富んでいます。このうち、今回は写真作品を紹介します。1979年の〈横浜百景展〉の素描作品のように景勝地を美しくとらえた作品も見られますが、多くの写真家が切り取っているのは建設中のベイブリッジやニュータウンなど21世紀に向けて開発の進む横浜の風景です。一方で、アメリカ海軍の通信施設がある町や外国人墓地を写した写真からは、横浜の歴史に想いをはせるまなざしがうかがえます。横浜市美術展開催の翌1989年には、昭和から平成に移り、みなとみらい21地区で横浜市制100周年、横浜開港130周年を記念して横浜博覧会が開催されました。

- 9 河崎英男《ドリームランド》1988年
ゼラチン・シルバー・プリント 29.9×44.9cm
- 10 西村建子《成田山参り》1988年
カラー・プリント 36.5×54.5cm
- 11 五十嵐英壽《ガスタック建設》1988年
ゼラチン・シルバー・プリント 52.9×35.4cm
- 12 小宮敬治《新興住宅(A)》1988年
カラー・プリント 53.4×43.2cm



9



10



11



12

特集展示1

横浜市所蔵 カメラ・写真コレクション

The Camera and Photography
Collection of the Yokohama City

カメラ・オブスクーラ／製作者不詳／1790年頃



横浜は日本における写真発祥の地の一つとして、近代日本の写真映像文化の歴史に大きく貢献したと言われています。横浜市はこうした歴史を踏まえ、アメリカのサーマン・F・ネイラー氏が世界各地から収集したコレクションを平成5・6年に取得しました。本コレクションは現在、青葉区にある横浜市民ギャラリーあざみ野が所蔵しています。

絵画と写真

カメラの前身である光学装置、カメラ・オブスクーラは、古くから絵画制作に取り入れられてきました。16世紀には画家たちにデッサンのための道具として用いられはじめ、18世紀になると小型化し、ヨーロッパの上流階級の若者の間で盛んだった古典の教養を学ぶ旅、グランド・ツアーなどに携行されて、風景鑑賞やスケッチに活用されます。ここで人々は、ニコラ・プッサン(1594-1665)やクロード・ロラン(1604/05?-1682)らの絵画を通じて見てきたヨーロッパ各地の自然や名所旧跡を、カメラ・オブスクーラのレンズを通して眺めました。

こうしたカメラ・オブスクーラによる視覚体験は、写真の発明へとつながっていきます。写真の発明者の一人、ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット(1800-1877)は、イタリアのコモ湖を訪れた時に風景スケッチに苦心したため、カメラ・オブスクーラに映った風景を定着させたいと思いつき、写真術の研究に着手しました。19世紀に写真が誕生するとそれまでカメラ・オブスクーラで鑑賞されていた風景は、写真家たちの被写体となりました。

戦後の日本のカメラ

太平洋戦争直後の日本では、海外の写真家や進駐軍の兵士が持ち込んだアメリカ製カメラ、スピード・グラフィックが払い下げられて、日本の報道写真家にも使用されました。1948年頃には、戦災を受けたり軍需工場としての機能を無くしたりしたことにより存続が危ぶまれていた国内のカメラメーカーの工場の再整備が進みます。すると、後に各社の主力となる35mmフィルムカメラを中心に新製品が出始め、1950年頃からは爆発的に流行した二眼レフが多く作られるなど、カメラ産業は復活していきます。海外のカメラに範を取りながらも独自の進化を遂げた日本製カメラは、写真家たちの愛機として活躍するようになっていきました。



キャノンIV Sb／キャノンカメラ株式会社／1952年



カメラ・ルシーダ／シャルル・シュヴァリエ／製作者不詳

特集展示2

漫画家・ヒサクニヒコが 描いた横浜

Yokohama in Cartoons Drawn by Kunihiko Hisa



〈SL 開通(明治5年)「横浜-新橋 30K」〉1978年 マジック、水彩、紙 72.6×102.4cm

ヒサクニヒコは大人向けの一コマ漫画で1960年代の終わりに漫画家としてデビューしました。作家の北杜夫(1927-2011)の依頼で『さびしい王様』(1969年、新潮社)の挿絵を描いたことをきっかけに、イラストや絵本も手がけるようになります。特に、児童文学作家・寺村輝夫(1928-2006)とタッグを組んだ「とんち話・むかし話」シリーズ(1976-1982年、あかね書房)はロングセラーとなり、世代を超えて多くの子どものために読み継がれています。1986年より雑誌『旅』(日本交通公社、現JTBパブリッシング)で紀行エッセイの連載を始めたのを機に、数々のエッセイ、テレビ・ラジオ出演など活動の幅を広げます。また、恐竜研究者としても知られています。こうした多彩な活動は、社会や物事を観察する独自の視点、対象に対する優しいまなざし、底知れぬ探究心、対象を確かにとらえる表現力と、軽妙なユーモアによって支えられています。横浜を描いた漫画からは、ヒサが幼い頃から住む横浜への愛着と、時代と共に移ろいゆく街への郷愁を感じることが出来ます。

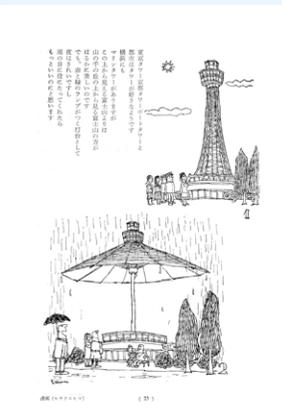
NOTE of YOKOHAMA ヨコハマノート

1970年の『漫画讀本』*1に16頁にわたって掲載されたヒサの初期作品。日本が高度成長に湧く一方で、世界がベトナム戦争の只中にあった頃の横浜の情景と時代の空気を独自の視点でアイロニカルに描いています。

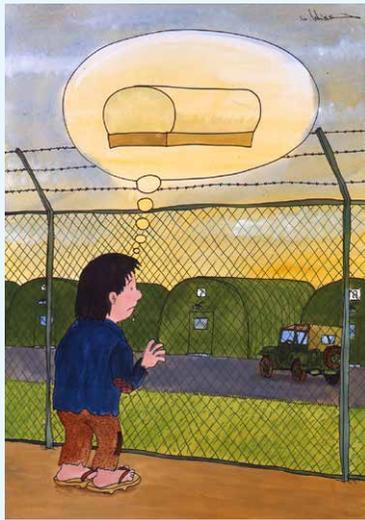
*1『漫画讀本』1954~1970年に文藝春秋新社(1966年から文藝春秋に改名)によって刊行された漫画雑誌。海外の漫画、戦前の日本の漫画、新作の漫画、エッセイを中心に構成され、戦後日本の「大人漫画」を牽引しました。掲載された主な作家は横山隆一(1909-2001)、杉浦幸雄(1911-2004)、手塚治虫(1928-1989)、長谷川町子(1920-1992)など。

ヨコハマ漫画フェスティバル

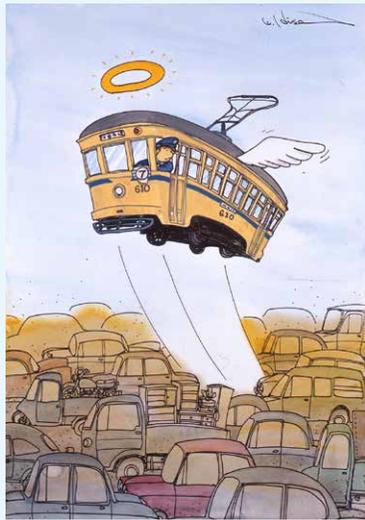
1978年横浜大通り公園の完成を記念して、横浜市民ギャラリーで「ヨコハマ漫画フェスティバル」が開催されました。横浜在住の柳原良平(1931-2015)とヒサが仲間たちに参加を呼びかけ、〈漫画集団〉*2を中心とした32名の漫画家やイラストレーターが、横浜の名所や歴史、事始めなどを個性あふれる大型の作品に表現しました。当館にはこれらの作品76点が収蔵され、ヒサはこのうち5点を手が



〈NOTE of YOKOHAMA ヨコハマノート〉より
1970年『漫画讀本』(文藝春秋) 複写



《占領下の伊勢佐木町【カマボコ兵舎の林立】》
1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.5×72.3cm



《市電廃止(昭41-47)【開通明治37年神奈川—大江橋間】》
1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.7×72.6cm



《三溪園雪景色》1978年
水彩、マジック、紙 102.5×72.3cm

インタビュー

当館では平成26年より、企画展にあわせ横浜市民ギャラリーにゆかりのある方々のインタビューをおこなっています。今回は出品作家のヒサクニヒコ氏、浜口タカシ氏にお話を伺いました。

※インタビューは映像化し、展覧会場で上映します。
また、横浜市民ギャラリーホームページ上で公開する予定です。



ヒサクニヒコ インタビュー

けています。2点には自身の幼少期の思い出が反映され、3点にはヒサが強い関心を寄せる乗り物が丹念に描かれています。

*2《漫画集団》1932年近藤日出造（1908-1979）、横山隆一（1909-2001）、杉浦幸雄（1911-2004）らが中心となり「新漫画派集団」を結成して、作家のマネージメントをおこないました。1945年「漫画集団」に改名し、大人向けの漫画を描く作家たちの親睦団体となりました。

『ZOO よこはま』挿絵原画

『ZOO よこはま』は横浜市動物園友の会が年4回発行している機関誌です。2005年にヒサが友の会会長に就任したのを機に誌面の刷新を提案し、以来巻頭には毎号、園長のコラムと共にヒサの挿絵が掲載されるようになりました。ヒサは大の動物好きで何十回もアフリカに足を運び、動物に関する著作も多く手がけています。7歳で野毛山に引越してきた1951年は、ちょうど野毛山動物園が開園した年でした。

ヒサクニヒコ

- 1944年 東京都生まれ
- 1951年 横浜に転居。以来横浜市在住
- 1966年 慶應義塾大学法学部卒業
- 1972年 『戦争 マンガ太平洋戦史』で第18回文藝春秋漫画賞を受賞
- 1978年 「ヨコハマ漫画フェスティバル」(横浜市民ギャラリー) 出品

『なるほど忍者大図鑑』(2009年、国土社)、『恐竜研究室』(2012年、あかね書房)、『人類の歴史を作った船の本』(2016年、こどもの未来社)など著書多数。
漫画集団、公益社団法人日本漫画家協会参与。

戦後の横浜で過ごした幼少時代

昭和26(1951)年僕が7歳、小学校2年生で引越ししてきて以来横浜に住んでいます。野毛山から伊勢佐木町の方に下りると両側に戦後の闇市の露店がずらーっと並んでいたんですね。伊勢佐木町の方に行くとはほとんど進駐軍の兵隊さんの遊び場で、関内も当時「関内牧場」と言って焼け跡が空き地のままで、昭和26、27年くらいの横浜は子どもにとっては遊び場だらけでした。見るものは珍しいし。山下公園に行くと「日本人立入禁止」というところで僕たち7、8歳くらいの子供たちは金網越しに外国の生活を見るわけですね。芝生を植えたペンキ塗りの家がいっ

ぱい建っているんですよ。そこで金髪の女の子がプールで遊んでいたり。当時テレビもないですからね。嘘みたいな景色がそこに見えて。混沌とした日本的なものアメリカ的なものと、戦前のものと戦後のものがごちゃごちゃになって横浜って実に生き生きとした環境でしたよね。僕が子どもの頃、ビジュアル的なものは本ぐらいいしかなかった。すると子どもたち同士で「君んここは『少年』、僕んここは『冒険王』、君んここは『漫画王』だ」とか月刊誌を分担して1週間ずつ回し読みをしたりね。その中にかっこいい飛行機の絵などが出ていても、自分の本じゃないから手元に残せないんですよね。だから自分のノートに模写するわけです。それが一番絵の訓練になっていたかもしれません。それから中学でも高校でも授業のノートを絵でとっていました。同窓会で中学校の時の先生に「君のノートは前の方から字が書いてあるけれども、後ろの方から絵が描いてあって絵の方が分量が多いんだよね」と言われて思い出しました。聞いている内容をそのまま挿絵にして描くとその方が印象に残っているんです。



幼い頃のヒサと両親 1944年7月20日
5ヶ月と18日目、父33歳、母30歳 父の階級は一等兵、腕に善行章をつけている



小学4-5年生頃のヒサと母親 野毛山動物園にて



『ZOO よこはま 100号』挿絵原画 2017年
ペン、水彩、グワッシュ、紙



『ZOO よこはま 85号』挿絵原画 2013年
ペン、水彩、グワッシュ、紙



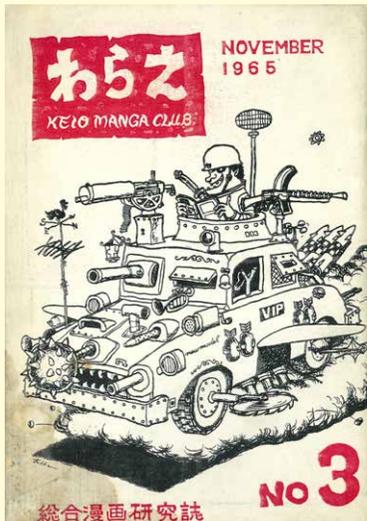
『ZOO よこはま 59号』挿絵原画 2006年
ペン、水彩、グワッシュ、紙



『ぼくって何だろう?』(ポプラ社、1991年)より

慶應義塾大学漫画クラブから漫画家へ大学に入ると漫画クラブというのがあって、高校の同級生と二人でのぞきに行ったんですね。そうしたら4年生だけが3人くらいいたのかな。久しぶりに入部希望

者が来たので「これにつぶれなくてすむね」と言われて。2年になった頭くらいに早慶漫画合戦というのをNHKの番組でやったんです。慶應ではもともといた2人にあと3人集めて5人でつち上げて、早稲田の方からは選抜で5人やってきて。早稲田の漫画研究会は当時40人くらいいて、園山俊二さん(1935-1993)や東海林さだおさん(1937年生まれ)が出た頃で勢いがあったんですね。番組では、出たお題を即席で漫画に描いたりね。そうしたら慶應の方が勝ってしまって、申し訳ないことに。そこからそれまでつぶれかかっていた漫画クラブが再興して、他の学校も混ぜて学生漫画連盟というのをつくって展覧会もしました。



ヒサが表紙を手がけた機関誌「わらエ 3号」1965年(慶應義塾大学漫画クラブ)

当時の漫画というのは子ども漫画と大人漫画とに完全に分かれていたんです。子ども漫画というのはいわゆる『少年サンデー』とか『少年マガジン』に始まるようなストーリー漫画中心。大人向けの漫画というと『漫画讀本』とか『漫画サンデー』とかちょっとお色気からんだ一コマやハコマのしゃれた大人の遊びのような感じのもの、新聞に出ている政治漫画。その頃からちょうど『少年マガジン』や『少年サンデー』の週刊誌の中で『巨人の星』や『あしたのジョー』の人気があると、読者がどンドン年をとるわけです。高校生、大学生だったのが大人になって、その時におもしろい漫画が続いているとみんな継続して読む。そうすると大人もコ

ミックを読むマーケットが『ビッグコミック』などでどンドン広がっていき、いわゆる漫画コミックが全世代をカバーするような時代になってきて。一コマ漫画の発表の場がだんだんなくなりつつある、ちょうどその変換期だったんですね。だから自分がいわゆる一コマ漫画のプロの作家になるとは思っていなかったんです。なれるとも思っていなかった。大学を出て10ヶ月だけサラリーマンをやったんです。世の中を知らずに知ったかぶりして漫画を描いてもそれは人の心を打つ漫画にならない、世の中のことを知りたいというのもありました。その間も展覧会をやったり自費出版で漫画集を出したりしていたんです。そうしたら文藝春秋の編集者がおもしろがり「一コマ漫画で自由に描いていいよ。『漫画讀本』の巻頭をあげるから16ページ好きな漫画を描きなさい」と言ってくれたのが漫画家としてのデビューでした。その頃文藝春秋で「文藝春秋漫画賞」というのがあり、審査員の目にも留まったらしくて、審査員の北杜夫さん(1927-2011)に「今度『小説新潮』で『さびしい王様』という童話を書くのでヒサさん絵を描いてください」と言われて挿絵を描いたりしているうちに、なんとなく漫画家としての仕事になってきたんです。

1978年ヨコハマ漫画フェスティバル
柳原良平さん(1931-2015)は本当に横浜と港が好きで、そのために横浜に引越していらしたような方なんです。漫画集団というのはいわゆる大人の漫画を描く人たち、横山隆一さん(1909-2001)や近藤日出造さん(1908-1979)、杉浦幸雄さん(1911-2004)、小島功さん(1928-2015)といった漫画家を中心のグループです。良平さんは横浜市のおちこちのセクションの方とよくお飲みになっていたの、たぶんその席のどこかで起きた話だと思うのですが、「ヒサクん、せっかくだから漫画集団のみんなに横浜を描いてもらおうよ」と言うので、二人で作戦を練ったわけです。まず基本的に漫画家は締切を守らない。だからただ「描いて」と言っても作品は集まらないだろう。それだったら描くこと自身をお祭りにしちゃおうと言うので、横浜市民ギャラリーのフロアを全部使って、全員分のパネルと画材と食べ物

を用意して、そこでみんなで騒ぎながら絵を描くと。終わった後は盛大に飲みにかかる。それなら絶対つられてくるに違いないと、そういう呼びかけをしまして。横浜市の歴史などの年表をつくって、この中から好きなテーマを選んでくださいとみんなに送り、決まった日に集まりそこで描いてもらったんですね。漫画家は普段の仕事では机の上でせいぜいB5とかA4ぐらいの紙に描くのに、この時は大きく描くので大丈夫かなあとははらしたんですけれども。人前で絵を描くってなかなかない。ところが先輩たちを見ていると筆をサササと動かし、でかいのを上手に描く。「ああなるほど、こんな描き方もあるんだ」と思ったりね。それから「なんか思ったよりうまくないな」とかね(笑)。絵が出来上がっていくプロセスもおもしろかったんですけれども、「これを絵にしたいな」と思った気持ちだけでも何か伝わるんだというのを感じました。テーマにこだわり過ぎて頭でかちになるばかりじゃなくて、漫画というのは本当に楽しくて自由に描いていいものなんだとしみじみ感じたものです。楽しかったですよ、すごく。

表現者としての思い

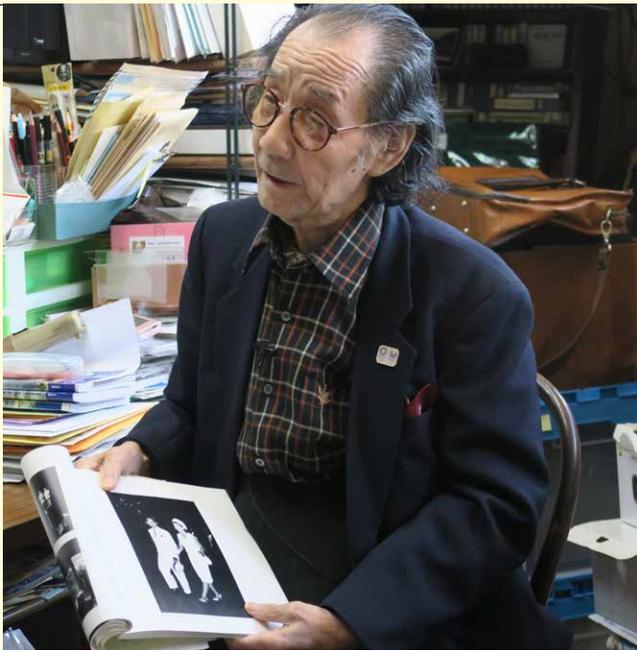
自分で見て自分で判断できる子どもたちになってもらいたい。だから子どもたちが興味のあるものを描きながらも、そういうものをあちこちに潜らせて伝えられたらと思っています。自分は出版で育っているし、出版の中で表現していきたいと、まだ忸怩たる思いのままなんとかあがいているんですね。戦後、戦争の匂いがぶんぶん残っているところから、朝鮮戦争とかベトナム戦争とか湾岸戦争とか日本にとって余所事の戦争というのを横で見ながら、いつまた巻き込まれるかもしれないという部分もあるわけです。戦争は一回巻き込まれたら最後、個人なんてどこにもなくなってしまうものですから、一人ひとりが自分の人生を全うできる、戦争で中断されない社会を継続できる目や考え方を持ってもらいたいと思っているんですね。

2017年12月6日
横浜市民ギャラリーにて
聞き手・編集：森 未祈

浜口タカシ インタビュー

1931年	静岡県生まれ	1987年	厚生大臣感謝状(中国残留孤児取材)
1955年	横浜に転居。以来横浜市在住		企画展「ドキュメント日本―激動の日々35年―」(横浜市民ギャラリー)
1963年	日本報道写真連盟横浜支部長	1997年	横浜文化賞
1964年	全日本毎日写真展総理大臣賞	2011年	日本報道写真連盟特別功労賞
1965年	日本写真家協会会員	2013年	富士山愛好家写真連盟理事長
1966年	横浜美術協会会員	2016年	二科会写真部名誉会員(横浜市民ギャラリー)
1969年	神奈川二科会会長		
1981年	企画展「北海に生きる」(横浜市民ギャラリー)		

『記録と瞬間』(1969年、日本報道写真連盟)、『ドキュメント・視覚』(1973年、日本カメラ社)、『戦慄の成田空港』(1978年)、『37年目の再会―中国残留孤児の記録』(1982年、朝日新聞社)、『報道写真家 浜口タカシが見た! 2011.3.11 東日本大震災の記録』(2011年、浜口タカシ写真事務所)、『反体制派』(2016年、禅フォトギャラリー) など著書多数。



移り住んだ当時の横浜

昭和30(1955)年、関西から友人を頼って横浜に来たんです。横浜に移り住んだ当時、小さな写真機店を営んでいました。以前の横浜市民ギャラリー*1の辺りは、焼野原でした。昭和24(1949)年頃は、その付近に飛行場や米軍のカマボコ兵舎がありましたが、僕が横浜に来た時にはそれが撤去されていて撮っていません。伊勢佐木町にあった野澤屋(後の横浜松坂屋)は、接収されていて進駐軍が出入りしていました。港の方は、山下公園も接収されていて兵舎が残っていました。昭



〔図版1〕〈皇太子殿下夫妻 横浜・山下公園にて〉1962年

和33(1958)年、平和球場(現在の横浜スタジアム)でおこなわれた横浜開港百年祭に皇太子殿下(現在の天皇陛下)が出席され祝辞をのべられました。その翌年、昭和34(1959)年に皇太子殿下が結婚され、僕は皇居前を通るお二人の馬車に投石された事件も撮っています。昭和37(1962)年には、山下公園で皇太子殿下ご夫妻を撮影しました〔図版1〕。僕は、二眼レフというレンズが二つ付いていて上からのぞきこむボックスカメラを使っていましたが、皇太子殿下が僕らカメラマンの方を向いてちらっと笑ってくれたんです。何年か後に僕が二科会の会員になり、皇太子殿下が天皇陛下になって二科展を見に来た時にその写真を献上しました。

日本報道写真連盟

横浜に移ってから、新聞で募集しているのを見て、昭和31(1956)年に日本報道写真連盟(以下、日報連)に入りました。当時は、土門拳さん(1909-1990)、木村伊兵衛さん(1901-1974)が理事をしていました。僕は、昭和38(1963)年に横浜支部長になり、その後、東日本本部委員長を務めました。日報連は、昭和26(1951)年4月の〈桜木町事件〉*2の現場を撮影したアマチュアカメラマンが、毎日新聞社に投稿したことをきっかけに結成されました。僕は、現在、日報連名誉会員です。

二科会写真部

昭和28(1953)年、当時、会長だった東郷青児さん(1897-1978)の発案で二科会写真部が創設されました。林忠彦さん(1918-1990)、秋山庄太郎さん(1920-2003)らが創設会員でした。林さんと秋山さんの示唆により、昭和44(1969)年に二科会神奈川支部が創立され、僕が支部会長を務めました。昭和48(1973)年には二科会写真部の会員、審査員になりました。林さんと秋山さんとは長い付き合いで、林さんは、よく一杯飲みながら歌を聴かせてくれました。林さんや秋山さんの企画展は、横浜市民ギャラリーでも開催しました*3。僕は、その展覧会実行委員のひとりでした。

横浜美術協会

平成28年(2016)年に、横浜美術協会会員在席50周年記念、特別功労者表彰を受けました。横浜に移り住んだ頃、応募したのが始まりですね。奥村泰宏さん(1914-1995)は、僕より一回り以上年上で当時ハマ展(横浜美術協会)の会員で、主に進駐軍を撮っていました。あとスナップ写真。奥村さんのお弟子さんだった常盤とよ子さん(1930年生まれ)は、赤線地帯を撮っていました。奥村さんから撮りなさいよって。男は入れませんから。女性じゃないと撮れない。赤線は昭和33(1958)年に廃止されたけど、それで常盤さんは一

躍有名になりました。

『**市電の詩**』写真集『市電の詩』^{*4}に書いてありますが、だんだん車が多くなって渋滞するということで、昭和47（1972）年に横浜の市電は全廃されました。この年3月31日の花電車が最後に市電がなくなった。現在、横浜市磯子区の滝頭にある〈横浜市電保存館〉に市電が収蔵してあって見学できます。『市電の詩』は、一緒に活動していた二科会のメンバーで手分けして撮影しました。ですから、あらゆる角度から撮っています。写っている車、三輪車を見るとその時代が見えてきます [p.3、図版1 参照]。ここからどんだん社会が発展していきました。

大学闘争
昭和43（1968）年から44（1969）年にかけて東大紛争があって、東京大学の安田講堂前に一万人近く集まって闘争がおこなわれました。当時、全共闘（全学共闘会議）というのが出来て、大学の改革と授業料値上げ、インターン制度に反対するデモが起きました。それが、東大から各大学に連鎖していった。最近になって、大学闘争や成田闘争の写真をまとめた『反体制派』^{*5}という写真集を刊行しました。これは闘争とは少し違うけれど僕が好きなニューモラスな写真 [図版2] で、横浜の伊勢佐木町で、メーデーに撮った写真です。当時、あまり景気がよくなって。これは親子でしょう。ヘルメットだけ被せて、裸で。行進しながら「俺たちに仕事をくれ」って叫んでいました。



[図版2] 〈「俺たちに仕事をくれ」メーデー行進」1974年

『**北海讃歌**』北海道は、青函トンネル調査坑を掘削した昭和40（1965）年、北海道側吉岡坑の海底トンネルを撮影したのが最初で、昭和49（1974）年頃から本格的に撮影するようになり約10年間通いました。根室半島、利尻島、礼文島、積丹半島など全域にわたり、毎年場所を変えて撮っていました。北海道は素晴らしいと思って。とにかく、北海道の人は力強く、寒中よく働き頭が下がる思いでした。何年も行っていると、漁民の船長さんと仲良くなって。船長さんの家に泊まりこんで、毎晩一杯飲んでいました。根室半島の納沙布岬では、「千島を返せ」とこの写真 [図版3] に見られるような風景があり、北方領土問題を目の当たりにしました。増毛港では、時化で風速23m、写真を撮るのは苦労しました。波の高さは軽く30〜40mくらい。これは崖の上から撮影しているんです [図版4]。立って撮影できない、吹き飛ばされてしまう。石を抱えて寝転んで、望遠200〜300mmで撮る。この写真は二度と撮れないです。北海道の写真は、写真集『北海讃歌』^{*6}にまとめました。

広島、長崎

僕は、少年の頃に空襲を受けたので、昭和32（1957）年頃に広島に行って撮影しました。長崎も随分撮りました。特に長崎で撮ったのは、被爆された方たちです。最初からカメラを向けられないから、写真集『記録と瞬間』^{*7}を持って、社会の矛盾を訴えたいと話をしてから了解を得て。平成28（2016）年5月にオバマ大統領が広島を訪問した時、広島平和記念公園でオバマ大統領と安倍首相が献花をするところをどうしても見たい、報道写真家として絶対撮らなくてはいけないと思い撮影しました。この時に、オバマ大統領が核兵器のない世界について演説していました。現職のアメリカ大統領として広島に来たのは、オバマ大統領が初めてです。

- [註]
 - *1 横浜市中区万代町 1-1 横浜市教育文化センター内
 - *2 1951年4月24日、日本国有鉄道、東海道本線支線（現、根岸線の一部、京浜東北線）桜木町駅構内で発生した火災事故。多数の焼死者、重軽傷者を出した。
 - *3 「林忠彦50年写真総集展」1990年、「秋山庄太郎写真展 往時茫々」1991年
 - *4 浜口タカシ フォト・グループ『市電の詩』1972年、神奈川二科会写真部
 - *5 浜口タカシ『反体制派』2016年、禅フォトギャラリー
 - *6 浜口タカシ『北海讃歌』1985年、くもん出版
 - *7 浜口タカシ『記録と瞬間』1969年、日本報道写真連盟

※ p.11〜12図版、いずれも浜口タカシ。図版2、3、4は横浜市民ギャラリー蔵（図版3、4は、本展には出品されません）



[図版3] 〈根室半島納沙布岬〉1978年



[図版4] 〈増毛港に打ち寄せる高波〉1976年

ですから、写真家としてやっと戦後が終わったという気持ちになりました。

写真を撮り続ける理由

僕はもういっぺん、広島、長崎を撮って今までの写真と一緒にして出版したいと思っています。それともう一つ、昭和39（1964）年にも撮影していますが、今度の東京オリンピックを撮りたい。それが撮れば、何時死んでもいいんです。写真は、記念写真というだけでなく、写真の価値観というか意義というか問題意識があるんです。記録に残さないといけない、いろんな出来事を世界に訴えないといけない、後世に伝えなければならないという信念で、報道写真家として撮影を続けています。

2017年12月7日
浜口タカシ写真事務所にて
聞き手・編集：大塚真弓

出品リスト

作家名	作品名	制作年	技法	サイズ(縦×横) cm
横浜 1950–1970				
五十嵐英壽	貯木場	1956	ゼラチン・シルバー・プリント	31.2×47.1
五十嵐英壽	チューサン接岸	1956	ゼラチン・シルバー・プリント	47.6×31.8
五十嵐英壽	大棧橋満席	1966	ゼラチン・シルバー・プリント	31.9×47.6
奥村泰宏	尾上町交差点	1949	ゼラチン・シルバー・プリント	33.9×33.9
奥村泰宏	職を求めてたむろする失業者・野毛町桜橋	1949	ゼラチン・シルバー・プリント	33.7×33.7
奥村泰宏	立入禁止・小港米軍キャンプ	1949	ゼラチン・シルバー・プリント	28.6×43.8
奥村泰宏	高砂町 漢方薬店	1950	ゼラチン・シルバー・プリント	34.1×34.0
奥村泰宏	米軍家族 伊勢佐木町一丁目	1950	ゼラチン・シルバー・プリント	33.8×33.7
奥村泰宏	米軍兵舎	1952	ゼラチン・シルバー・プリント	31.0×44.3
奥村泰宏	撤去された米軍兵舎跡	1956	ゼラチン・シルバー・プリント	29.3×44.7
常盤とよ子	真金町遊郭初店	1954	ゼラチン・シルバー・プリント	26.6×40.5
常盤とよ子	窓 日の出町裏	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.9×39.6
常盤とよ子	風呂帰り	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	40.5×26.7
浜口タカシ	市電の詩	1957	ゼラチン・シルバー・プリント	38.9×38.4
浜口タカシ	中村川付近	1970	ゼラチン・シルバー・プリント	36.0×49.2
浜口タカシ	車内風景	1972	ゼラチン・シルバー・プリント	36.7×49.8
浜口タカシ	滝頭車庫	1972	ゼラチン・シルバー・プリント	38.8×51.9
浜口タカシ	日本大通り	1972	ゼラチン・シルバー・プリント	49.3×36.0
浜口タカシ	最後の移民船	1973	ゼラチン・シルバー・プリント	36.7×49.9
浜口タカシ	「俺たちに仕事をくれ」メーデー行進	1974	ゼラチン・シルバー・プリント	50.1×36.7
浜口タカシ	最後の SL D51	1975	ゼラチン・シルバー・プリント	36.8×49.8

素描でたどる横浜百景 1979

青木一美	エリヤ（増徳院裏より）	1979	水彩、紙	31.1×41.2
青木四郎	大佛次郎記念館	1979	水彩、紙	37.1×44.1
浅生田光司	帷子川流域	1979	水彩、マジック、紙	48.1×33.1
浅生田光司	常盤公園圍景	1979	水彩、マジック、紙	33.1×48.2
安保健二	赤煉瓦倉庫	1979	鉛筆、水彩、紙	31.1×41.0
市川 勉	山下埠頭	1979	鉛筆、水彩、紙	31.6×39.6
入江正巳	中華街関帝廟	1979	墨、顔彩、紙	28.1×39.6
遠藤典太	イギリス館	1979	鉛筆、水彩、紙	16.3×24.1
大坂三千司	中央市場	1979	鉛筆、水彩、紙	30.3×40.2
大坂三千司	ピール工場	1979	鉛筆、水彩、紙	30.1×39.5
川島 実	神奈川県戦没者慰霊堂	1979	鉛筆、水彩、紙	29.1×45.8
北岡数彦	大棧橋	1979	インク、紙	32.0×41.6
國領経郎	新横浜駅	1979	鉛筆、紙	28.7×38.1
國領経郎	鶴見川東横線鉄橋	1979	鉛筆、紙	28.5×38.1
小島 昇	伊勢山皇太神宮	1979	墨、岩絵具、紙	24.2×33.6
小山オサム	マリントワー	1979	水彩、紙	32.8×24.3
櫻庭彦治	三溪園の五月 (1)	1979	油彩、パネル	23.2×30.1
櫻庭彦治	三溪園の五月 (2)	1979	油彩、パネル	24.0×28.9
柴田善登	東横浜貨物駅	1979	鉛筆、水彩、紙	30.0×39.4
島田正次	三ツ池公園	1979	水彩、バステル、紙	27.4×39.6
島田四郎	教文センター	1979	水彩、紙	36.6×52.6

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました
次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)

浅生田光司	小宮敬治	浜口タカシ
五十嵐英壽	小山治夫	ヒサクニヒコ
大坂テルエ	桜庭慎吾	山田 隆
河崎和子	常盤とよ子	株式会社 国土社
栗林阿裕子	西村建子	野毛山動物園

横浜市民ギャラリーコレクション展 2018

写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に Tracing the Scenery of Yokohama through photographs and drawings 1950-1980

横浜市民ギャラリー

2018年3月2日(金)～18日(日)

10:00～18:00(入場は17:30まで) 入場無料 会期中無休

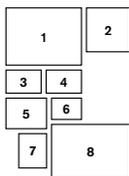
横浜市民ギャラリー展示室 1、2

主催

横浜市民ギャラリー

(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団/西田装美株式会社 共同事業体)

表紙写真



- 1 山崎秀夫(米海軍通信隊(上瀬谷)) 1979年
鉛筆、水彩、紙 30.8×40.3cm
- 2 浜口タカシ(市電の詩) 1957年
ゼラチン・シルバー・プリント 38.9×38.4cm
- 3 常盤とよ子(真金町遊郭初店) 1954年
ゼラチン・シルバー・プリント 26.6×40.5cm
- 4 奥村泰宏(立入禁止・小港米軍キャンプ) 1949年
ゼラチン・シルバー・プリント 28.6×43.8cm
- 5 大坂三千司(ビール工場) 1979年
鉛筆、水彩、紙 30.1×39.5cm
- 6 浜口タカシ(最後のSL D51) 1975年
ゼラチン・シルバー・プリント 36.8×49.8cm
- 7 小宮敬治(新興住宅(B)) 1988年
カラー・プリント 53.7×43.4cm
- 8 奥村泰宏(米軍兵舎) 1952年
ゼラチン・シルバー・プリント 31.0×44.3cm

関連イベント

アーティストトーク「ヒサクニヒコの横浜談議」

3月3日(土) 14:00～15:30

会場 横浜市民ギャラリー 4階アトリエ

出演 ヒサクニヒコ(出品作家、漫画家)

横浜市民ギャラリー 2 館学芸員によるギャラリートーク

3月11日(日) 14:00～14:40

会場 横浜市民ギャラリー展示室 1、2

鑑賞サポーターによるトーク

3月10日(土)、17日(土) 14:00～

会場 横浜市民ギャラリー展示室 1、2

本展では公募した13名の鑑賞サポーターが活動しています。1月13日、20日、2月3日、17日の4日間の事前研修で、それぞれが選んだ出品作品について調べ、自身が受けた印象や感想を盛り込んだ文章を執筆しました。

別紙「鑑賞サポーターによる作品紹介シート」に収録しています。また、上記日程でトークを開催します。

鑑賞サポーター

相原純子、今井千尋、小柳出健一、上妻千賀子、小峯恵理子、
佐野康之、柴田悦美、鈴木敬子、瀬川直樹、成瀬正臣、野田正樹、
花村未佳、山田 稔

学芸担当 大塚真弓、森 未祈、齋藤里紗

企画協力 横浜市民ギャラリーあざみ野

執筆 大塚真弓(p.3～5)、森 未祈(p.7～8)、

日比谷安希子(横浜市民ギャラリーあざみ野学芸員)(p.6)

デザイン 重実生哉

印刷 山陽印刷株式会社

インタビュー映像制作 播本和宜

編集・発行

横浜市民ギャラリー

〒220-0031 横浜西区宮崎町26番地1

TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033 <http://ycag.yafjp.org/>